
風よ歌え、その神の子に

金田ふみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風よ歌え、その神の子に

【Nコード】

N2790E

【作者名】

金田ふみ

【あらすじ】

世界を救って、俺はどうしたいのかな・・・時は後アレト暦320年。遙か昔に人間を支配していた「神族」の陰謀が、再びこの世界を闇に染めつつあった。神の力を宿すという神具「風のフォルセウス」に選ばれた少年クレオは、亡き友との約束を果たす為、神族を滅ぼす旅に出る。しかしそれは、孤独な彼が自分を追い詰める為の悲しい旅だった・・・。いくつもの出会いと別れを経て、クレオは知る。自分が本当に守りたかったものは何なのかを・・・。

プロローグ

かつて創造神アレトは、二種類の「ヒト」を世界に生み落とした

老いることのない体と、天を割り地を裂く強大な魔力を持つ「神族」と

知恵以外の力を持たぬ「人間」である

神族は人間を支配し、虐げた

肥沃な大地は、神族の暴力によって傷つき、生物は滅びつつあった

2

創造神アレトは嘆いた

自らの力に酔った神族から魔力を奪い、その力を4つの武器に封じて告げた

この武器に封じた魔力は、もはや神族には扱えぬ

人間と同じ寿命と力になり、己の罪を嘆くがよい

生命の源の魔力を失った神族たちは悔やみ、怒り、悲しみ、一人一人死んでいった

やがて神族の最後の一人が死ぬと、世界の「ヒト」は人間だけになった

人間は国を築き、栄えた

アレトが魔力を封じた4つの武器は神具と呼ばれ、使い手は神の子と呼ばれた

神の子は世界を希望で照らし、人間たちをさらなる繁栄に導くという

これがこの世界の創世神話である

プロローグ（後書き）

はじめまして、小説初体験の金田ふみです。

昔ながらの古風なファンタジーを目指してみました。

ご意見、ご感想お待ちしております！

心の誓い

ユーグ大陸の山岳地帯。その雄大さから「神々の額」と称されるアルレスト山脈の奥にその村はあった。ユーミルという名前だが、地図には記されていない。そこに住む者達だけが知る村だ。

「汝は翼、汝は息吹！」

太陽が山の尾根に沈み、残光で風景が黄金に染まる夕暮れ時。村から離れた場所にある小高い丘に、凜とした少女の声が響いた。

亜麻色の長い髪をした美しい少女だ。年は17、8といったところか。細い肢体には似合わない銀色の剣を右手に持ち、空に掲げている。周りには子供から老人まで、おそらく村人全員が集まってその光景を見守っていた。

「悠久の時より空を翔る、風という名の守護者よ！」

夜の帳に沈みかけた太陽の紅い光は、彼女の白い肌や銀色の剣さえをもその色に染める。自然が作り出したものとはいえ、そのあまりの映像美にその場にいる誰もが目を奪われた。

「わが名はシルヴィー」アルウィン！すべての属性と引き換えに、汝の力を欲するもの！この身に宿りて、その力を貸せ！」

高らかに言葉が締めくくられると、銀色の剣から淡い緑の光が溢れ出した。光はシルヴィーの体を覆いつくすように満ち、やがて彼女の心臓の上に集うと、泡が弾けるように散じて消えた。

「すごい・・・すごいぞ、成功だ・・・！」

しばし訪れた沈黙の後、興奮を抑えきれぬばかりに村人の一人が口を開いた。それをきっかけに、次々と歓喜と賞賛の声上がり、丘を埋め尽くす。

「儀式は成功だ！シルヴィーは神剣フォルセウスに選ばれた！」
「村の護り手がうまれたぞ……！！」

その日、新たな神剣の使い手と、村の護り手の誕生を祝う宴は深夜まで続いた。

「こんな所にいたの。」
宴も一段落し、丘の上にはまた静寂が戻っていた。空の闇が青灰色に変わり、朝の訪れを告げようと太陽が上り始めた頃、木陰に座り込んだ人影に向かってシルヴィーは声をかけた。

「！」

がさりと音を立てて跳びあがったのは黒髪の少年だ。幼さの残る顔立ちに、黒々とした大きな瞳ばかりがやけに目立つ。年はシルヴィーよりも少し下といった所だろうか。

「儀式の時から、ずっとそこに隠れていたわね？クレオ。声をかけてくれればよかったのに。」

腰に手をあてて悪戯っぽく睨むと、少年……クレオール・ウィンドは慌てて立ち上がった。見つめ合う視線は、シルヴィーの方が

僅かに高い。

「ごめん。声をかけづらくて・・・皆すごく楽しそうに話していたから。」

「全く、放してもらえなくて大変だったわ。長老たちまであんなに浮かれて・・・」

「仕方ないよ。村には長いこと護り手がいなかった・・・誰も、その剣に選ばれなかったから・・・」

クレオは目を伏せると、今は彼女の腰に下げられている剣を見つめた。優美な曲線を描く肘ほどの長さのそれは、近くで見ると様々な彫刻が施されていて美しい。

風のフォルセウス。

創世神話に記されている、神の力を宿した4つの神具のうちの1つだ。神具の使い手は、かつてこの世界を支配したと言われる神族のごとく、強い魔力を扱えるようになるという。

過去何度も神具を巡って争いが起こってきたが、ここユーミルの村は、そういった歴史の騒乱から神具を護るために、数百年も人の交わりを絶ってきた。

神具は自ら使い手となる人間を選ぶという。血筋なのか、能力なのか、何をもって選ばれるのかは定かではないが、並の人間には扱えぬ物であることだけは確かだ。世界では、神具に選ばれた人間を「神の子」と呼び崇めるが、この村では「護り手」と呼んでいた。

村と神具、両方を護る者という意味だが、なぜこの村がずっとこうしてフォルセティを護っているのか、クレオは知らない。幼い少年にとってはただ純粹な、憧れの象徴でしかなかったからだ。

「すごい剣だ・・・こんな力を宿せるなんて・・・本当にすごい

よ！」

「・・・ありがとう、クレオ。」

シルヴィーは微笑んで答えると、視線を落として同じように剣を見つめた。

「本当にすごい力だわ・・・この剣は。体の中に嵐を閉じ込めているような気分・・・気を抜くと私まで切り裂かれてしまいそうよ。」

「うらやましいなあ、シルヴィー・・・。俺は剣に選ばなかった男なのに・・・。」

羨望と感嘆と、少しの嫉妬のこもった声でクレオが呟くと、シルヴィーは慈愛に満ちた笑みを浮かべて言った。

「剣に選ばれても、選ばれなくても・・・私たちは変わらないわ。二人で守りましょう。この村を・・・みんなを。」

亜麻色の髪が朝焼けの光に透けて金色に輝く。蜂蜜のような暖かい色の瞳に見つめられ

て、クレオは我知らず頬が熱くなるのを感じた。

「そうだね！二人で守ろう！この村を・・・みんなを！」

そして、君も守ってみせる・・・続く言葉を、クレオは飲み込んだ。むろん照れのせいもあったが、彼女は今や神剣に選ばれた村の護り手。村人達すべての命を希望を背負う存在になったのだ。選ばれなかった「ただの人間」の自分が、どうしてそのような図々しいことを口に出来ようか。

（でも・・・）

だから、その誓いは彼の心の中だけに収められた。

（いつかきつと強くなる、君を守るぐらいに・・・。）

闇の解放

レンディア国王、バハラムⅡエルⅡドⅡレンディアは血塗られた剣を見て笑った。祭壇に祭られている鏡に恍惚とした顔を写し、この世の者ならざる不気味さを漂わせている。

「・・・ち、父上・・・！」

地に伏して呻く青年・・・レンディア国王子、サーデインは背を這う恐怖に身をすくませずにはいらなかった。老いてなお賢王として名を轟かせる父が、まるで別人のように禍々しいものに見えたのだ。最近では病で床に伏しがちだったのが嘘のように、全身から生気が満ち溢れている。

（いや・・・）

サーデインは秀麗な眉を歪め、先刻他ならぬ父の手で無惨に貫かれた腹部を押さえた。

（これはもはや『邪気』・・・だ・・・いつもの父上ではない・・・。）

腹部からはおびただしい血が流れ、緋色の絨毯に黒い染みを広げていた。自分の体から、血液とともに急速に体温が奪われていくのを感じる。

「父上・・・目を・・・覚まして下さい・・・一体なぜ・・・。」意識が黒い闇に包まれていくのを耐えて声を絞り出す。するとバハラムは、芝居がかったしぐさで振り向くと、濡れたように赤く光る瞳でサーデインを見下ろした。

「哀れだな人間の国の王子よ。ずっと父親を守ってきたつもりでいたのか。」

「な．．．に．．．？」

愉快的な玩具を見つけた子供のように、バハラムは笑っている。

「だが、親子ごっこももう終わりだ。闇の力が最も強まるこの夜に、『神の子』の血を捧

げることによって封印は解かれた。お前は、この日のためだけに生かされて来たのだ。」

「．．．．．！？」

失血で弛緩していた体が強張った。その言葉に打ちのめされながらも琥珀色の瞳を開き、なんとか目の前にいる人間が父である証拠を見つけようとした。だが見れば見るほど、それが父の姿をしただけのおぞましいものだとしか感じられない。

「父上は．．．お前は父上では．．．ないのか．．．？」

「あれの魂はもう消えた。」

「！？」

歌うようにバハラムの姿をしたものが囁いた。サーデインの苦しむ姿を楽しむようにゆっくりと一つ一つ言葉を紡いでいく。

「三年前、遠征先の廃墟の中で、あれは我が封印されている鏡を見つけた。その時に我が闇に魂を喰われたのだ．．．」

窓の外で銀色の月が禍々しいほどに輝いていた。逆行に浮かぶ黒い影の中、紅い瞳だけが異様な光を宿している。

「．．．．．長かった．．．．．」

バハラムの唇が動いて、人ならざるものの言葉を紡ぐ。

「幾千の時を過ごしたこの身だが、この三年ほど耐え難い月日は無かった。脆弱な人間の皮を被り、浅ましくも下賤な存在を我が子と呼び、共に過ごさねばならないとは。」

サーデインの手が、じわじわと腰の剣に伸びる。身体の苦痛はも

はや限界を超えていたが、これ以上父の姿をした者からこのような言葉を聞きたくなかった。

（父上……。私は、貴方の無念も知らずに三年間も……。）

「だがそれも、今日で終わりだ。さあ、用済みの家畜らしく醜く死ぬがいい。」

サーデイン琥珀の瞳が怒りで見開かれた。剣の柄を握り、自らが流した血を踏み散らすように地を蹴る。

「貴様……！」

澄んだ音を立てて鞘から抜かれた剣が青白く光り、父の姿をした悪魔の首元に迫る。

「お兄様……！！」

銀の刃が相手の命を屠るかと思われた瞬間、背後から悲痛な叫び声が上がった。視界の端に、赤いドレスが幻のように映る。その姿と声が、妹……。シエラのものであると分かった瞬間、彼の体を鈍い衝撃が切り裂いた。

レンディアの異邦人

レンディア王国はユーグ大陸の中心となる大都市だ。

軍事、貿易、文化すべての発信地で、季節を問わず様々な国から来た人々で賑わっている。現国王バハラムⅡエルードⅡレンディアの4代前にあたるグローザムが周辺の3国を統一して出来たこの国は、アルレスト山脈という天然の要塞に守られて他国の追隨を許さぬ大国に成長を遂げた。国の守護の象徴として置かれたレンディア騎士団が、その軍略と智謀で安定した治安を守り続けていることも有名である。

「すごい人だな。」

「ああ、毎年この時期が一番賑わうな。どの店も掻き入れ時だろう。」

城門の前に添え付けられた机の前に、二人の兵士が座っていた。

「しかし、今年の武闘会の参加者はすごいな。去年の2倍以上だ。」

「そりゃそうだろう。建国記念祭の一番の見せ場だし、今年の優勝者は特別にサーディン殿下の戴冠式に招待されることになっている。」

「そうだな、戴冠式には各国の王族も参加する。さぞ豪華なんだろうなあ・・・普通に生きてりゃ絶対に体験できないぜ。」

武闘会は毎年行われる建国記念祭の余興で、年齢や身分問わずに参加が出来ることになっている。優勝者には相当の報奨と名誉が与えられ、それをきっかけに政界に顔売り出そうと考える者も少なくない。二人の仕事は訪れた参加希望者を名簿に記録することだっ

たのだが、受付時間も締め切り間近になり忙しさがなくなってくると、自然と会話に花が咲き始めた。

「しかし、なんで今年から急にそんなことになったんだろうなあ・・・。」

「やはり、去年の暮れに亡くなられたバハラム陛下のこともあるだろう。」

「沈んだ国民の感情を浮上させようってことか？それにしちゃ随分と・・・。」

会話に夢中になっていると、ふっと太陽の光が遮られて影が落ちた。見上げるといつの間そこにいたのだろう。外套で全身をすっぽりと覆った奇妙な人影が佇んでいた。

「な、なんだお前は・・・。」

兵士は思わず身をこわばらせた。奇怪な出で立ちもさることながら、まがりなりにも兵士として訓練を積んだ自分達が、これほど側に近づくまで気配の一つも感じなかったことに驚く。いや、こうして面と向かっている今でさえ、生きている人間の気配がひどく希薄だった。

「受付を。」

「な、何？」

「武闘会の受付を。」

ぼそぼそと喋る声に耳を澄ませると、どうやらまだ若い男である

らしいことが分かった。とりあえず亡霊や魔物の類でなかったことに心中でほっと安堵すると、つとめて平静を装いながら規定どおりの手続きを始めることにした。

「と、とりあえずその外套を脱いで顔を確認させてもらう。それから名前と職業、出身地を。」

ばさり、鳥が羽ばたくような音を立てて外套が外された。現れた姿に、兵士は声を止めて一瞬息を吞む。想像していたよりもあまりにも若い少年の姿がそこにあったからだ。

研磨した黒曜石を思わせる硬質な髪。凜々しい眉の下には、黒に見えるほど深い緑の双眸がある。象牙色の滑らかな肌と、成長期特有の痩せ過ぎた体軀は、とても武闘会に出ることが想像出来ないような軟弱さだ。異国風の緑の衣装の腰に下げられた銀色の剣とて、まともに扱えるのかどうか怪しいものだ。

「お前、年はいくつだ？」

「・・・１７だ。」

二人の兵士は思わず顔を見合わせた。今年の・・・いや、今年までの出場者の中で最年少だ。しかし、命しらずな少年が名誉と金欲しさに参加を決めたという雰囲気でもない。その奇妙さに、二人は動揺を隠すこともせずまじまじと少年の顔を見つめた。

「成人前だと参加が出来ないのか？」

あまりにも長く沈黙が流れたせいか、少年がわずかに困惑の滲む声で問うた。

「い、いや別に・・・すまない。出身地と名前を・・・」

「・・・アルレスト山脈の奥の、ユーミルという村から来た。」

少年は名乗ると、底の見えない濃緑の瞳で一瞬だけ遠くを見つめて言った。

「名前はクレオ。・・・クレオ＝ルーウィンド。」

レンディアの異邦人（後書き）

またもや新キャラ登場。 テンポよく話を進めるのって難しい・・・

レンディア王城

「正気か？」

レンディア城の玉座の間へと続く廊下で、二人の男が言い争っていた。

「人が遠征で国を離れている間に、勝手なことをしてくれたものだ。いつからこの城の門は、どこの馬の骨とも分からん者を受け入れるほど脆弱なものになったのだ。」

眉間に深い皺を刻み、厳しい顔で相手を叱責しているのはレンディア騎士団長であるレギオン・バルトークだ。3ヶ月の遠征から今しがた帰還したばかりで、その体には白銀の

甲冑を纏ったままにいる。28歳という、一国の騎士団長としては異例の若さだが、長身のその出で立ちといい、凄味のある整った顔立ちといい、相手を震え上がらせるには充分の迫力があつた。

「私とて止めたさ。誰が戴冠式に一般人を参加させようなんて思うものか。そいつが何か野蛮な振る舞いをしたら、恥をかくことは目に見えている。それどころか国の品位まで疑われてしまうかもしれない……。」

深刻な口調ながら、どこか他人事じみた冷めた視線でそう答えたのは宰相のシース・ド・ギルディック。くすんだ茶色の髪を伸ばしっぱなしのまま背中に流し、分厚い黒ぶちの眼鏡をかけたその容貌は、宰相というよりは冴えない学者や研究者然としている。だが、その額には、「英知の泉」と呼ばれる東大陸最高峰の学力を誇る学院を卒業した証、第三の目を模した細い銀色のサークレットが輝いていた。

「お前が首謀者ではなかったのか？では誰がこのようなことを。よりもよって戴冠式などと、冗談が過ぎるぞ。」

「残念ながら、レギオン騎士団長殿。もう冗談という次元は超えているんだ。既に国民に触れを出してしまっただし、他国にも知れ渡っている。おかげで今年の武闘会参加者は去年の倍以上さ。都のあの賑わいを見ただろう？」

「呑気に言っている場合か！一体どうするつもりなのだ！！」

堅固な城の天井を震わせるほどの怒声に、あまり物事に動じないシースもさすがに首をすくめた。緊迫した雰囲気の時ほどふざけたことを言ってしまうのは自分の悪い癖だが、立場の割に感情を抑えるということを知らないレギオンを、ひとまず落ち着かせるために口を開きかける。するといつのまにか目前に迫っていた玉座の間の扉が開いた。

「待つて。シースを怒らないで下さい。」

中から聞こえた声に、レギオンがはつと我に返ったように振り向いた。声の主の姿を見た瞬間、驚愕で紫紺の瞳を見開く。

「すべて、私が命じたことなのです・・・」

ゆるく波打つ黒い髪に縁取られた蒼白な顔。琥珀色の瞳。真紅の礼服の上に黒いマントを羽織ったその姿。

「サーデイン・・・殿下・・・？」

信じられぬとばかりに震える唇から紡がれたその名は、この国の

新たな君主となるべき人間の名だ。だがもし本当にサーディン本人であつたなら、この程度の驚きでは済まないことを、レギオンは誰よりも知っていた。

「レギオン、シース、お願いします。」

二人の瞳を順番に見つめながら、サーディンは・・・否、サーディンに扮して男装を纏ったレンディア国王女、シェラザード「アル」レンディアは言った。

「私に力を貸して下さい。」

思惑と決意

ミディール国第7王子、カイルⅡレネⅡミディールは上機嫌でレンディア城の廊下を歩いていた。

日の光を宿してきらめく金髪や、新緑のごとく鮮やかな翠眼は、様々な国の人間が入り乱れるレンディアの中にあってもひととき異彩を放つ。15でこの国に来たときは少女と見まごうばかりの容姿だったが、2年たった今では顔立ちもすつきりと精悍に整い、背も伸びた。城内の人間とすれ違えば、誰もが振り向くほどの恵まれた容姿だ。

だが、ミディール王家を良く知る者ならば、彼の姿を見てただ美しいと見とれるばかりではないだろう。血統を重視するミディール王族の誰もが持つ、「ミディールの碧玉」と呼ばれる氷のごとく青き瞳を、彼は宿していなかったゆえ。

通常ならば二月ほどの留学が、もう二年以上になっている理由もそこにある。彼はその異端な容姿ゆえ、性格には異端な容姿に生まれざるをえなかった卑しき血統ゆえに、故郷を離れているのだ。

とはいえ、この厄介払いされているとも言える状況はカイルにとって逆には喜ばしいものだった。古くさい慣習や規律に縛られたミディールにも、陰湿かつ幼稚な嫌がらせを繰り返す異母兄弟達にもいい加減辟易としていたからだ。このレンディアでは容姿を卑下されることもなく、かと言って他国の王族だからと必要以上にもてはやされることもなかったのだ。実に居心地のよい環境を彼は満喫していた。

彼がめざしているのは城の外れにある兵舎だ。去年の終わりに国王であるバハラムが病死して以来外出を控えていたのだが、3ヶ月ぶりに騎士団が遠征から帰還したと聞き、久々に剣の稽古でも見てもらおうと思っていた。

（武闘会前で警備が厳しくなってるからって、こう毎日勉強ばかりじゃな。）

王族とはいえまだ17になったばかりの若者だ。勉強は決して嫌いではなかったが、体を動かして汗をかきたいという欲求には抗いたいものがある。

（できればレギオンと直接手合わせをしたい所だけど、疲れてるだろうしな。ルイかジークでも捕まえるか。）

あれこれと考えながら、騎士団の兵舎に向かおうと玉座の間の前を横切ろうとしたその

時、扉の向こうから人の話し声が聞こえた。

「・・・すぎる。シエラの身に何かあったら・・・。」
「でも・・・。」

（レギオンと・・・姫か？）

思わず足を止めて、そろりと扉に近づく。まずいことなのだろうという自覚はあったが、普段カイルが目にする、王女と臣下としての節度を保った会話とはどこか違ったその空気に、よからぬ好奇心が頭をもたげた。

「……あれは、絶対に兄様が死んだと思っっているんです。戴冠式の話聞けば、必ず兄様の姿を確認しにやって来るはず。『神の子』である兄様を、生かしておくはずがないのだから。」

「見破られたらどうするのです。確かに見た目は瓜二つがだが、他国の王族を騙す事は出来ても、あの魔物の目を欺けるとは思えない。」

「今しか無いんですレギオン！あれはまだ父様の体を借りずして動くことが出来ない。封印を完全に解くために、どんな機会でも逃すまいと焦っているはずです。時が経ち、更に力を取り戻すようなことがあれば、もうどんな知恵や力を使っても倒せなくなる！」

何の話だか全くもって分からないが、どうやら先日亡くなったバハラム王と、病に伏せて姿を見せないサーディン王子に関する話のようだ。つまりは国家機密といってもいいような話題なのだろうが、若さゆえの好奇心はとどまることを知らず、カイルはますます扉に耳を近づけた。

「……随分と余計な入れ知恵をしたようだな。危険な推測ばかり吹き込んで王女を惑わすとは、宰相らしからぬ振る舞いではないのか、シース。」

「……レンディア王家に知を授けるのが私の役目。」

新たな声、宰相のシースがよどみ無く言葉を紡ぐのが聞こえた。

「確かに、いい加減な推測ほど危険なものはないだろう。だが推測ひとつ立てられない者が戦で勝利することは出来ない。国を救うこともまたしかり。」

自信に満ちた台詞が扉の向こうから響いてくる。カイルにとって、宰相のシースはどこかつかみにくい人間だった。ここ数年での外交、政治で、彼の采配がレンディアにもたらした恩恵は数知れない。紛れも無く「天才」と呼ばれる部類に入る人間であることは明らかだが、それを匂わせるような雰囲気や態度は微塵も感じられない。

城のあちこちで昼寝をしていたり、花街にふらりと出かけては娘たちと戯れる姿ばかりを目にし、一体いつ仕事をしているのかと首を傾げるばかりだ。飄々として人を食ったような態度ばかりとっているが、その本音や心の内が全く見えないことも、逆に油断ならぬい何かを感じさせた。

「私はこの知の力であらゆる厄災をこの国から退けなくてはならない。今回の危険は、そのための代償だと判断したのさ。」

「・・・厄災？今のこの状況ですら代償に過ぎないと言い張るほどの厄災が、この国を襲うというのか？」

「・・・襲うというより、再びこの国に戻ってくると言うべきかな。レギオン、去年の暮れに我が国を襲ったあの脅威、忘れたわけではあるまい。いや、忘れていないからこそ、遠征と称して緘口令が緩んでいないかを確認してきたんだろう？自らすべての国境を回ってまで。」

「・・・。」

レギオンが息を呑む気配がした。

「あの魔物は自分の姿を見られたにもかかわらず君達には何もしなかった。そして王の姿をしている間も実に大人しく病人の振りをしていた。その気になれば、我々を皆殺して王の姿のまま国を乗っ取ることも出来たのに。」

「・・・何が言いたい。」

「奴の目的はただ一つ、『神の子』・・・雷の神具ゲイボルグに選ばれしサーディン殿下の命を奪うことのみだったのだ・・・そして、この仮説が正しければこの国は再び脅威に曝されることになる、なぜなら。」

シースはそこで言葉を切ると、眼鏡の奥の灰色の瞳で射るようにレギオンを見つめた。

「なぜなら、この国には新たな『神の子』がもっているから。」

「・・・・・・。」

レギオンのものであるう、重苦しいため息が扉の内から聞こえる。それだけではない、緊迫した彼らの空気は扉ごしに体を突き刺すかのような威圧感があつた。相変わらずさっぱりな内容だが、あまりに深刻すぎる雰囲気（いよいよまずいか）と思い、カイルは慎重に扉から身を離しはじめた。

「状況は分かっただろう？さしあたっては何も言わずに明日の武闘会の警備を例年の倍に増やして欲しい。東西南北の城壁の警備もだ。それと、君の部下を一人、参加者として武闘会に潜入させることは出来ないか？」

「・・・・確かに、どこにどんな姿で現れるか分からないのなら、参加者に扮して内部を探る人間もいるだろうな。しかし・・・緘口令を布いている以上、騎士団の騎士すべてに真実を話すわけにもいくまい。信頼のおける部下を選ぶことは出来るが・・・」

言葉を濁らせたレギオンの後を、シエラが継いだ。

「騎士団は我が国の力の象徴。遠征や戦だけでなく、祭典にも必ず参加します。国民に

とつては憧れの的のようなもので、顔を知られている騎士が多すぎるんです。レギオンの直属の部下ならなおさら・・・」

苦い面持ちでうなずくレギオンを見、今度はシースが重いため息をついた。

「長く平和が続いたことが、こんな所であだになるとはね・・・」

「・・・真実を話せるような信用のおける人物で、なおかつ国民に顔を知られていない人物・・・」

「それだけではない、武闘会の参加者として潜入するのであれば、多少剣の腕もなければ怪しまれるだろう。」

「・・・。」

長く会話が続いていた玉座の間に沈黙が流れ、一瞬だけ静寂が満ちた。すると扉の向こ

うで微かな物音がするのが聞こえる。

「誰だ！」

「いてっ！」

レギオンが勢いよく扉を開くと、何かがぶつかる鈍い音とうめき声が聞こえた。鮮やかな金髪の頭を抑え、緋色の絨毯の上にうずくまっていたのは・・・。

「カ、カイル王子・・・！」

シエラの顔がさっと青ざめた。

「あ、ちが、ごめ・・・別に盗み聞きとかそんなことは・・・いや、してたけど・・・ってあれ？何で姫王子の服・・・。」

後ろめたさと焦りで呂律が回らなくなっているカイルと、驚きで絶句しているシエラ。その横では眉間を押さえながらレギオンが項垂れている。先程までの緊迫した空気がこんな形で壊されたことに、誰もがまともに対応出来ていなかった。

「・・・なるほど・・・そうか。」

ただ一人、カイルを見つめながら何やら思案しているシースを除いては。

思惑と決意（後書き）

久々の投稿です。戦闘シーンは難しい・・・相手が人間じゃないとなおさらです。

武闘会

「勝者、クレオール・ウィンド殿！」

剣を鞘に収める音が歓声にかき消された。クレオは息を吞んで周りを見回すと、足早に踵を返して逃げるように壇上を後にする。

生まれてから一度たりともこれほど大勢の人間を見たことはない。まして囲まれて、注目されることなど有り得なかった。対戦が終わり、集中が解かれると途端に照れと居心地の悪さに襲われ、顔も上げられない有様である。

午前に始まった武闘会も次で準決勝になる。興味半分や見栄だけで出場した者、また運や実力の無かった者は既に闘技場を後にしていた。試合が始まる前こそ若いクレオに同情や嘲笑を向けていた観客達だが、対戦者の殆どを数秒で地に伏させるその圧倒的な強さが、いつの間にか人気を集めていたらしい。

「クレオ殿、次の試合です。」

周りを見ないよう極端に俯いて剣の手入れをしていたクレオに、全身鎧を纏った騎士が声をかけた。見ると次の相手が既に壇上で待っているのが見える。参加者も大分減ってきたため、思ったよりも試合の間隔が短くなっていたらしい。「すみません」と呟き、あわてて壇上に続く階段へ向かった。

「準決勝戦、クレオール・ウィンド殿対、アーク・シミター殿。」

剣を抜いて構えながら相手の姿をまじまじと見つめる。不思議な格好だ。古ぼけた兜をすっぽりと被り、面覆を一番下まで下げている。あれで前が見えているのだろうか・・・？

「はじめ！」

合図とともに仕掛けたのは意外にもアークの方だった。無骨な兜に似合わぬ俊敏な動きで繰り出された細剣の突きを、クレオの短刀が弾き返す。だがその反動を少しも感じさせずに続けざまに剣激が襲う。

（強い・・・！）

流麗で相手の剣を受け流すクレオに対し、アークの剣はどちらかといえば力押しだ。だが細剣を鞭のようにしならせる剣さばきは、予想もつかない軌跡を描いて迫ってくる。それを受ける剣を握る手に、わずかに汗が滲むのを感じた。

「おい。あの剣、どこかで見たことないか・・・？」

貴賓席の横で、騎士ジークⅡロウエンが口を開いた。それに小声で応じるのは、同じ貴賓席の警備を任された騎士ルイⅡハルベルトだ。レギオン直属の若い騎士達である。

「・・・兜の方が？子供の方が？」

「兜の方だ。あの力押しで滅茶苦茶な剣筋、どこかカイル王子に似ているような気が・・・」

茶色の混じった金髪を風に揺らし、ジークは首を傾げた。ルイは

黒に近い茶髪を掻きあげて、気だるげに肩を竦める。

「まさか。確かにカイル様の剣は乱暴だが、あれほど酷くはあるまい。」

「そうだろうか・・・」

「あれがもしカイル様だったら、俺達が今まで教えてきた剣術が全部無駄だったということになるぞ。第一仮にも一国の王子があんな所にいるわけがないだろう。」

「まあ、それもそうだが・・・。」

まだ納得のいかない様子のジークを一瞥すると、ルイは壇上に視線を戻した。

「確かに、あんな強引に顔を隠して、怪しい奴だ。だが、あのあからさまな偽名・・・アーク＝シミター（斧と剣）だなんて。もしあれがカイル様ならもう少しまともな名前にするんじゃないか。」

快活に笑い出したルイを小声でたしなめると、ジークも思考を断ち切って正面を向き直った。心のどこかにまだ引っかかりはあったが、まあ杞憂であろう。

「・・・ほんとだよ。もっと他になかったわけ。」

「・・・五月蠅い。」

その後ろに控えたシークと、眉間に盛大な皺を寄せたレギオンのやりとりが二人に聞こえなかったのは、幸運なことであった。

幾度めかの剣撃を受けたとき、唐突にアークが口を開いた。

「なんでもう一本の剣を抜かない？」

クレオは目を見張った。相手の声が自分とさほど変わらぬ少年の声であることに驚いて。

「本当は二刀使いなんだろう！？」

確かにクレオの腰にはもう一本の剣が下がっている。肘ほどの長さの、銀色で優美な弧を描くそれ。しかしクレオは今手にしている鋼の曲刀だけで勝負をつけるつもりだった。こんな余興じみたことに、この剣を抜くつもりはない。

「この剣は、使わない・・・！」

「手をつ、抜いてんのか・・・っ」

言葉を交わしながら激しく剣がぶつかる。互いに息が切れ。僅かに集中が切れる隙を狙い合うやりとりは、体力だけでなく精神力も大きく削りとっていく。

いつしか観客達も、その空気に吞まれて静まり返っていた。と、突然空を切るような音が聞こえて、太陽の光を何かが遮った。

「な、何だ・・・！？」

驚いて空を見上げた時には、すでにその影は空から消えている。次の瞬間、凄まじい轟音が壇上で響いた。

「うっ！」

「ぐあっ！」

クレオもアークも、激しい衝撃に壇上から吹き飛ばされた。壁に叩き付けられ、したたかに背を打つ。何か巨大なものが、闘技場の中央に落下したらしい。

「な、何だ・・・」

クレオは立ち込める土煙の中で目を凝らしながら、背中に冷たいものが走るのを感じていた。瓦礫の中、この低く響いている息遣いのようなものは何なのか。

「ばかな、魔物・・・!？」

その光景を貴賓席から見下ろしていたジークが叫ぶ。横でルイが剣を抜くのと同時に風が吹き、下にいたクレオ達の視界が暗れた。

一本一本が鎌のように鋭く曲がった牙。青銅のような質感の鱗、魂を貫くように光る黄金の瞳。

「ド、ドラゴン・・・!？」

武闘会（後書き）

久しぶりの更新です。長く間を空けてしまつてすみませんでした。ちよこちよこ直しながら進めていきたいと思います。

混乱

「ばかな、本物か・・・？」

全身に鳥肌が立つのを感じ、ルイが呻いた。サーデインの後ろに控えていたシースは、その声を聞いて貴賓席のテラスから壇上を見下ろした。

「・・・確かに、伝説のドラゴンの姿そのものだ・・・しかし何故・・・」

眼鏡のブリッジを中指で押さえ、珍しく動揺を隠せない様子で灰色の目を眇める。

ドラゴンは、アシード神族がまだこの世界に存在していた神代の頃に生息していたとされる生き物だ。とはいえ、古代の遺跡の壁画等にわずかにその姿が記されているのみで、生きている姿はおろか化石すら確認されていない。大部分の人間が、神話の中だけに住む架空の生き物だと信じている。そんなものが突然空から現れたとあっては、動揺しない人間の方がおかしいだろう。

「第一部隊、弓隊、魔導隊は戦闘配備につけ！第三、第四部隊は観客を避難させた後、武闘会場を閉鎖、外の警備に当たっている者と協力して市街の被害を確認せよ！」

混乱と恐怖で支配された会場に、真っ先に冷静さを取り戻したレギオンの声が響いた。机上の策謀ではシースに遠く及ばないが、戦うべき時には誰よりも冷静に徹することが出来るのが、レンディア騎士団長たる由縁だ。

「ジーク、お前は一個中隊を率いて殿下達の避難を。」

ドラゴンを凝視して固まっていたジークも、レギオンの声に次第に冷静さを取り戻す。

「分かりました。団長はどうなさるおつもりで？」

「私はこれより壇上の二人を救出し、あの魔物を討つ。ルイ、援護を頼むぞ。」

「レギオン・・・！」

玉座から良く知る声が聞こえた。

振り向くと、不安をたたえた琥珀色の視線とぶつかる。サーディンと瓜二つの容貌に扮していても、どうしようもなく彼女自身を思わせてしまうそのまなざしから、レギオンは無理矢理目を逸らした。

「貴方は明日の戴冠式でこの国の王となられるお方。我らレンディア騎士団が、魂と誇りにかけてお守りいたします。どうかこの場からお逃げ下さい。『サーディン殿下』」

「・・・。・・・分かった。どうか無事で・・・民達を頼む。」

ほとんど攫われるかのような勢いで騎士たちに連れていかれる背中を見送ると、レギオンは感情を消し去った顔で傍らの槍を引き寄せた。

身の丈ほどもある巨大な槍だ。円錐を長く引き伸ばしたような刃部も、それに連なる持ち手も、すべてが眩い銀色。至る所に施された緻密な彫刻のせいか、巨体でありながらどこか優美な印象だ。

握る手に力を込める。そこから流れ込む力を、確かに感じる。

「使うのか、レギオン。」

緊張した面持ちでシースが声をかけた。

「分かっていると思うが、これは罠だ。力は隠して戦うんだ。特に『失われし魔法』は。」

「・・・伝説では神族とともに渡り合っていたという魔物だ。人間が使える程度の魔法で倒せるとは思えん。」

「そうだ、だから罠なんだ。ドラゴンを倒せる者は『神の子』・・・つまり次の標的だ。」

眉間に皺を寄せ、苦いため息をレギオンはついた。ごくまれに、こんな時に、自分が何の身分もない人間ではないことを恨む。

「・・・もし私が次の標的になった時は、この国を離れればいいだけのことだ。」

「レギオン・・・」

「力を隠し、民を見殺しにしながら生き延びれば、いつか陛下を殺した元凶のもとへ辿り着けるかも知れん。だが、それは国を護つたとは言うまい。見捨てられた民は、二度とレンディアの土を踏もうとはしないだろう。」

ルイに出撃の合図を送って踵を返すレギオンの背に、肩をすくめてシースが呟いた。薄い唇には諦めの色濃い笑みが浮かんでいる。

「やれやれ、予想を裏切らない返答だ・・・。」

戦い

「くっ！」

大木のようなドラゴンの腕がクレオを襲う。後ろに跳んで避けると、自分の立っていた床が目の前で粘土のように容易く抉られる。掠っただけで致命傷になることは明らかだ。死角に廻りこみながら幾度も剣で応戦するが、鱗にすら傷をつけれない。

（まずい、このままじゃ・・・）

度重なる斬撃に、先に限界に達したのは剣の方だった、刃こぼれが亀裂に変わり、攻撃を受けることすら難しくなってくると、自然と腰にある銀の剣の方へと意識が移った。

ゴオオオオ・・・

不意に頭上から不穏な音が響いた。見ると、ドラゴンの牙の隙間から青白い炎がちろちろと覗いている。

「あぶねえ！」

声とともにクレオの前に踊り出たのは例の兜の剣士、アークだ。ドラゴンに向けて手をかざし、叫ぶ。

「水の護りよ！『静かなる水面』！」

瞬間、薄い水の膜が二人を包んだ。空気中の水分を凝固させて防壁となす中級魔法だ。

神代の時代の大戦で強力な魔法のほとんどが世界から姿を消した今、これほど完璧に具現化した魔法を目にすることは稀である。

（まさか、こいつも・・・？）

クレオが息を呑むと、次の瞬間頭上から溶岩のような炎が降り注いだ。

「ぐ・・・っ！」

アークの手の上で水の膜が音を立てて沸騰する。後ろにいるクレオにも凄まじい熱と圧力が襲い掛かった。アークが苦悶の表情で「もたねえ・・・早く逃げ・・・」と呻くのが聞こえたが、次の瞬間無常にも水の膜の最後の一層が蒸発して消えた。

業火の洗礼を受ける直前、クレオがアークの腰を掴んで後ろに跳んでいなければ、二人とも灰すら残らなかっただろう。余波に煽られてあちこちに火傷を負ったが、それでも壇上の床の石のようにドロドロに溶けてしまうことだけは免れた。

「熱・・・っ！」

床に投げ出されたアークがぐもった悲鳴を上げた。炎を受けた兜が熱を持って顔を焼いているようだ。「大丈夫か!？」と強引に兜を外すと、中から眩い金髪が零れ落ちる。額

に火傷を追った顔は、やはり自分といくつも変わらぬ少年のもの。

ドオオオン

再び響いた轟音に顔を上げると、炎で焼け爛れた床をものともせず踏みしめてドラゴン

が迫っていた。足元には意識の混濁したアークが倒れている。彼を抱えて避けることは不可能だ。

（シルヴィー・・・力を・・・）

クレオは銀の剣に手をかけた。かつてシルヴィーの持ち物であった、「風のフォルセウス」だ。余興のような武闘会で使う気にはな

れなかった物だが、今日の前には恐ろしい魔物と、身を挺して自分を庇ってくれた人間がいる。僅かに迷う心を振り切り、鞘から刃を抜こうとした、その時。

「貫け紫電！『雷の鎚』！」

後方から響いた声とともに、落雷がドラゴンを襲った。

救援

「貫け紫電！『雷の槌』！」

後方から響いた声とともに、落雷がドラゴンを襲った。耳を塞ぎたくなるような咆哮を上げて仰け反る巨体。毒々しいまでに鮮やかな黄色の腹部が目映る。

（！ここなら・・・！）

鱗のない無防備な腹に斬撃を与えようとクレオが身構えると、その脇を紫の影が通り抜けた。音もなくドラゴンに迫り、クレオが頭に描いていたように銀色の輝きでもってその肉を存分に切り裂く。

「下がっていなさい。」

紫の影は長身の偉丈夫だった。白銀の甲冑の上に纏った濃紫の外套にはレンディア騎士団の紋章が刺繍されている。甲冑の上に外套をつけることが許されるのは騎士団長だけであることをクレオは知る由もなかったが、先程の身のこなしや隙のない佇まいで、相当な実力者であることを悟ることは難しくなかった。

「カ、カイル王子・・・！？」

ほとんど黒に見える茶色の髪を揺らし、ルイがアークの元へ駆け寄った。

「水精よ、慈悲の輝きを。『癒しの水音』・・・」

翳した手甲の手のひらから淡い水色の光が溢れ出すと、照らされたアークの傷がみるみる塞がっていくのが見える。ふと体に力が戻ってくる感じがすると、自分の体のあちこちにあった傷も癒えていた。

「う・・・」

重たげに長い金色の睫毛をあげて括目したアークに、溜息をついてルイが問うた。

「驚きました。一体何だつてこんなことに・・・？」
未だ朦朧とする頭を振り、ちらりとレギオンの方を見やってからカイルが呟く。

「・・・悪い、面白半分で、黙って参加したんだ・・・。」

苦し紛れについた罪のない嘘は、しかしルイを欺くことは出来なかった。頂垂れるカイルを見つめ、背を向けたレギオンに聞こえるようにわざと大きな声で言葉を紡ぐ。

「やれやれ、この説明は後でゆっくりしてもらいますよ！先程の無様な剣術と、センスのない偽名のわけもね！」

言うなり剣を抜き放つと、渋面を浮かべてこちらを睨んでいるレギオンの隣に並んだ。

「・・・あと、どうして病気のはずのサーディン殿下が女性になっているのかもいいかげん教えていただけませんかね。」

小声で囁かれた言葉に、レギオンは息を呑む。横を向くとルイがどこかすまなそうに笑みを浮かべていた。

「・・・気づいてるのは俺とジークだけですけどね。なにせ俺達は筋金入りの『シェラザード様』ファンですから。」

さすがに団長には負けますが。冗談めいたジークの言葉は、ドラゴンの咆哮に掻き消された。

救援（後書き）

いつも間が空いてしまつてすみません。

少しづつ見て下さる方が増えているようで嬉しいです。

色々勉強しながら書いていきますので、どんどんご意見や感想をお聞かせいただければと思います。

古の力

手負いの獣が牙を剥くかのごとく、鋭さを増した一撃が空を切る。どくどくと青い血を滴らせていた傷跡が、みるみる塞がっていくのが見える。

「・・・やはり効かないか・・・。」

鋭利な爪の一閃をかわしながら。ルイが叫んだ。

「次は回復する暇など無いぞ！切り裂け！『風の刃』！」

「轟け断罪の響！『雷鳴の剣』！」

二人から放たれた魔法は、先刻とは違いドラゴンの鱗をわずかに傷付けただけだった。抉れた皮膚が瞬く間に盛りあがり、再生されていく。

（どんどん傷が治るスピードが上がっていく・・・。）

絶え間なく攻撃を繰り返す2人の後方で、クレオは緑の瞳を曇らせた。騎士達の魔法が脆弱なわけではない。むしろ他に類を見ないほど強い魔力であることは明らかだ。しかし、魔法を受ければ受けるほどドラゴンの皮膚は硬さを増し、合間に繰り返される剣撃をものともしなくなっていく。

（攻撃はもともと効かないんだ。魔法の力が足りない・・・もつと強力な魔法でないと・・・。）

なぜそう思うのかはクレオにも分からなかった。だが、確信していると言ってもいい。

（分かる・・・どうすれば勝てるのか・・・）

音も無く、クレオは剣を抜いた。銀色に輝く神剣フォルセティを。

「・・・これ以上は時間の無駄だ。ルイ、下がっている。」
「団長？」

レギオンは白銀の槍を水平に構えた。鏡のように磨かれた刃が目の前の異形を映す。

『力は隠して戦うんだ』

『民達を頼む』

シースとシエラの言葉が脳裏をかすめる。それは、迷いの後に決意をレギオンにもたらした。

（『神槍ゲイボルグ』よ、私と共に戦え！）

「汝は光、汝は裁き」

レギオンの周りの空気が薄紫色の輝きを帯びる。

「悠久の時より天を切り裂く・・・」

「悠久の時より空を翔る、風という名の守護者よ！」

突然、レギオンの背後から詠唱が轟いた。振り返ると、先程助けた少年が銀色の剣を翳している。

「我が名はクレオール・ウィンド！古の盟約により汝の力を使役する者。」

これと良く似た詠唱を、レギオンは知っていた。そして、銀の剣から発せられる力の正体も。

「まさか・・・神の子・・・！？」

「荒れ狂う天よ、全てを無へ還せ！『無慈悲なる嵐』！」

詠唱の終わりと共に巻き起こった嵐は、風というにはあまりに禍々しい凶器。強靱なドラゴンは、断末魔すら上げることなく一瞬でその身体を幾千もの肉塊へと変えた。バラバラになった鱗を巻き上げながらひとしきり暴れた後、その見えない刃はまるで嘘のように微風へと変わって消えた。

「な・・・、今の魔法は・・・。」

ドラゴンの残骸の前に言葉を失っているレギオンとルイの背後で、ドサリと何かが崩れる音がする。

力を使い果たした少年が、地に倒れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2790e/>

風よ歌え、その神の子に

2010年12月26日14時16分発行